用言の発展

折口信夫

青空文庫

われ〳〵は常につくろふとかたゝかふとかいふ所謂延言の一種を使うて居つて何の疑をもおこさぬ。今日の発音ではつくろふもたゝかふも、みな終止形はおの韻をもつたら行長音なりか行長音なりになつてしまふのであるから疑のおこらぬのも尤である。けれども仮字づかひについて考を及してみるとどうもをかしい。なぜつくろふのro は rofu でかたらふの ro は rafu なのか、どういふわけでまたゝかふの ko は kafu でかこふの ko は kofu でなければならぬのか、妙な事だといふと常識はたゞちにかう応へる。

その疑は今日の発音を土台として考へるから起るので、昔はつくろふを tukuro-fu、かたらふを katara-fu と発音したからである、またたゝかふは tataka-fu、かこふは kako-fu と発音通りにうつしたのにすぎないとこたへる。けれども疑はその点ではない。形容詞や動詞をとつて考へてみると、

くや・し　うらやま・し　あぶなか・しい　あら・し
やさ・し　たゝは・し
べか・し　めか・し
うごか・す
さか・る　こが・る　まか・る

などのごとく動詞形容詞助動詞すなはち用言の将然段又はあの韻を以て終つて居る語から他の語につゞいてまた用言になつたらしいものがあるかとおもへば、一方には用言の終止段から他の語につゞいて同じく再びある用言を形づくつたらしく見えるものがある。

いつく・し　いきどほろ・し
おそろ・し　さも・しい
うごも・つ
おこ（〳〵く）・す　つも（〳〵む）・る
こも・る　なゆ・ぐ

などが即ちそれである。然るに、をかしい事が此処にある。それは、意味も形式も殆ど同じ語で、将然言から出たのも終止言から出たのも二つともにあることである。

よそはし＝よそほし
このまし＝このもし
くるはし＝くるほし
よろこはし＝よろこほし

きか・す＝きこ・す　おもは・す（敬）＝おもほ・す　おは・す＝おほ・す
とゞろか・す＝とゞろこ・す（古事記、岩戸びらきの条）

人はこれらの終止段から出たらしい語をば悉くあの韻がお（即ちう）にうつゝた音韻の転訛であるといふけれども、それでは何やら安心のならぬ所があるやうにおもふ。その不安心の点を出発地として、下のやうな推論がなりたつた。

自分のよんだ限りの少しばかりの諸先達の著書のうちには、これこそとおもはれる考がなかつた様に記憶する。大抵やはり将然段から出たものとして、よそほしとかおもほすとかは音韻の転訛であるとやうにとかれてゐる。こゝに卑見をのべるに先だつて、まづある提言をなすべき必要を認める。それは「用言の語根は体言的の意味あひをもつてゐる」といふことである。全体体言といふ名称は形式の上にあるのではあるけれど、こゝには名詞というてしまうてはしつ

くりとをさまらぬから、かりに意味の上にこの名称を借用した。

語根が体言的の意味あひをもつてゐるといふと、こゝに自然と名詞語根説と語根名詞説とが対立してくる。即ち歌とうたふとは何れが先に存してをつたかといふ争がもちあがる。自分は名詞語根説を把るから、勿論歌がもとで、うたふは後になつたのであると答へる。けれども反対者の説く所にも理由のあることは認めてをる。然しそれが誤解であるといふことを少しばかり論じてみようとおもふ。

かなし・む　そゝ・る　かこ・む　いこ・ふ　しづ・る

などの語によつてみても名詞語根説が語根名詞説よりもまさつてゐる事は明かである。

かなしむは形容詞から来たもので誰もかなしむからかなしといふ語が出来たとはいふまい（このかなしむのかなしは体言である事は後にいふ）。そゝるのそゝ、よゝむのよゝなどは擬声といふのか、擬状といふのか、ともかくも八品詞以外のやゝ感嘆詞に近い語である。これを体言的（意味上の）に借用して、むとかるとかいふ用言にうつす接尾語をつけたのであつてみれば、誰しもそゝ、よゝはそゝる、よゝむの語根から出たのだとは主張すまいとおもふ。ましてそゝのかすとか（そゝめくとか、そゝや秋風などのそゝは、これとは少し系統がちがふ様である）よゝめく、よゝなくなどゝいふ語があつてみれば、そんな議論はおくびにも出る筈のものぢやない。かこむ、しづるなどは次に示す簡単な表をもつても、語根名詞説を破るだけの材料をもつてゐる。

「　――（釣錘）
――「――枝
――輪――鞍
――「――ごゝろ
――おり
しづ「「――みや（出雲国造神賀詞に志都宮忌静仕奉）
――「――く
――「――む
――「――る
――「――か
――「「――や（やか）
「「――む（こむ）
――「――す
――「
かく「――ふ
――「――る
「――やか

しづむ静心なく花のちるやらんと解してゐる。然しこれはよろしくないと助動詞らむ静心なくては理屈におちておもしろくないといはれたが、先生の解釈の方がなほ〳〵理屈におちて趣がない。少しわき路にはいるけれども、この時代の歌にはかういふらむしたとしてはよろしくない。それかといつてしづかでは勿論わるい。しづく、しづる、しづむなどに共通した下にしづむ様な心もちがあるのである。しづか、しづや（やか）は、もとやはりしづむやうな心もちのしづにかまたはや（やか）がついたものであらう。催馬楽に、しづや男といふ語が見える。これは物に動ぜぬ沈着な

男であるのだといふ。このしづかとかしづや（やか）とかいふ語が多く用ゐられたから、そこではじめてしづといふ語に静といふ意が生じたのであらう。

つけていふが、賤男、賤の家などのしづは今はないけれど、古い動詞の一つにちがひない。かき（垣）といふ語が今もなほ連用名詞法の俤を存してゐる。祝詞によくでる「あめのかきたつかぎり」のかきとでも訳すべきで外と境をたてる意がある。

かくす、かくむ、かこふ、かくるは、このかくといふ体言的の語があつて後に出来た語である事はいなまれぬ。

かづら・ぐといふ語についても同様の事がいはれる。かづら（鬘）といふ語があつてのちはじめて出来る筈の語で、決してかづらぐから鬘がうまれたとはいふことが出来ない。その外かた・ぐとかはら・むとかちか・ふ（ちかごとなどいふ）、うら・ふ（うらなふと意殆ど同じい）、あが・ふ（あがなふと意殆ど同じい）、あぎと・ふ（魚のあぎと・ふをいふ。あぎとをはたらかしたもの。童児のあぎとふはあき・とふである）とかいふ語を見ても、かたぐから肩、はらむから腹、ちかふからちか、うらふ、うらなふから占、あがふ、あがなふから贖、あきとふから顎などが生れたとは決して考へることはできない。

尚数行いひそへておくが、語根名詞説が正しくて名詞語根説が誤だと主張する論者に次の現象について説明を促さうと思ふ。

（一）　たしかに体言といふべきものであつて、ある接尾語をよんで用言となる理由はどうであるか、即ち、

あき・なふ（あきじこり、あきうど）
音・なふ　まか・なふ（まかだち）
まひ・なふ（わかければ道ゆき知らじまひはせむ下べの使おひてとほらせ　憶良）
荷・なふ　甘・なふ　まじ・なふ（まじ物、まじこる）
等のなふ
たゝ・よふ（たゝふ、たゝはし）
不知（イサ）・よふ　もこ・よふ（むくめく、むく〳〵し）
等のよふ
さき・はふ　わさ・はふ
いは・ふ◎（いは忌、即ちゆには、ゆゝしのゆと関係がある）
種（クサ）・はひ（ちぐさ、くさ〳〵）
味・はふ
等のはふ
ちり・ぼふ　よろ・ぼふ　き・ほふ
等のほふ
たゞ・し（正といふ名詞は動詞にたづぬがあることから思ふとたづといふ語があつて、恐らくはその名詞法なのであらう。それにし〈しく形〉がついたのである◎）
ひさ・し（見ずひさに、ひさにふる）　これ・しき（これしきもの）
もの・し　もの〳〵・し　おほやけ◎〳〵・し
女・し　おとな◎・し　われ〳〵・しき（我々しき分際）
こまいぬ◎・しく（狛犬らしくである。枕草子に二ヶ所見えて居る。但し関根先生は狛犬獅子也といはれたけれど、なほ次のくま〳〵しくなどからみると狛犬しくであらう）

くま〳〵・しく（きはやかならぬこと。夕顔に、こゝかしこのくま〳〵しくおぼえ給ふにものゝあしおとひし〳〵とふみならしつゝ）

等のし

なが・らふ（ながるの延と称せられるながらふではない）

等のらふ

その外

めく（とき・めく、うご・めく）

つく（がさ・つく、うろ・つく、そは・つく）

がる（まろ・がる、くら・がる、ひろ・がる）

がる（いやがる、かなしがる）

かふ　く（ぐ）　す（ず）　つ（づ）

ぬ　む　ふ（ぶ）　ゆ　る　う（得）

等の接尾語がついて動詞をつくるのはどう説明するのか。

（二）　かれ・す　つき・す　しに・す

などのかれ、つき、しには動詞の連用名詞法でなうて何であるか。

（三）　料理がれうる、装束がしやうぞくと動詞になり、おはもじ（はづかしいこと）、ひもじが、おはもじい、ひもじいと形容詞になるのはどういふものか。

（四）　わかやか　やはらか　すみやか　などと、

わかやぐ　やはらぐ　すみやく　などゝは、どちらが前に出来たかなどゝいふ事は別として、やはらかのら（か）、わかやかのやは何のためについてゐるのかといふことについて詳細の説明がきゝたい。

注意

や、ら、かの説明を求めるにあたつて、自分の立脚地から見たや、ら、かの説明をしておく必要を感ずる。

やはらかのら、わかやかのや、ほこりかのか、あてはかのは等は、名詞をつくる接尾語だと考へる。

やは、わか、ほこり、あてなどにはすでに体言的の意はあるのだけれども、完全な体言とはなりをふせぬから、らなり、やなり、かなり、はなりをつけてその体言的の意をやゝ完全にして、名詞になり、形容詞になり、副詞になり用ゐたものとおもはれる。そして尚いふと、単にや、ら、か、はといふ単純な外部から添加した語ではなく、もと〳〵活用のあつた語の将然言であらうと思ふ。これについてはなほ後にいふ所があらう。

古事記上巻の須勢理媛の歌に　あやかきの布波夜賀斯多尓、むしふすま尓古夜賀斯多尓、たくぶすま佐夜具賀斯多尓　とあるそのふはや、にこやは今でいふとふはやかとか、ふは〳〵したとか、にこやかとかいふべきところであるが、佐夜具といふ動詞が連体名詞法からがといふ弖爾波をよんだ如くすぐにふはが下に、にこが下にとしたゞけではものたらぬからやをよんだので、多分これはゆといふ動詞接尾語がついたのが将然にやの形をとつたのであらう。たをやめなどもさうである。古事記あたりに手弱女（天真名井宇気比の条）と字をあてゝゐる所からたよわめの転であると説明してゐるけれども、これはむしろたわとかたをとかにやの添はつたもので、女に対して形容詞のやうにつゞいたものと見る方が正しからう。一体やとらとは音が近いから、或は音転であるかともおもはれる。たよら（たよや、たよやか）、さはら松風などゝいふ語もある。あてはかといふ

語のはは多分あてぶといふ語の将然言ではありはすまいか。今でこそ一つはあてぶといひ、一つはあてはかと清濁の区別があるけれども、それによつて語の系統を無視するわけにはゆかない。

さやぐの名詞法がさやか（「たくぶすまさやぐが下に」は栲衾のさやかなるもとにといふ意味であることは勿論である）である。みやびか、なよびか、ほこりか、にほひかなどのかはやが脱けたものとも、連用名詞法についたものとも思はれる。尚やが単にやとしてついたのでなしに、ある動詞からうつつたのであらうといふ事は、さゆの名詞法がさやであり、あてぶの名詞法があてはであるといふことによつて稍たしかめられる。

（五）　かこ・ふとかしづ・るとかいふ語がかくとかしづとかいふ語より以前にあつたこと、または偶然にかくとか、しづとかいふ語を無関係な数種の語の中に没交渉的にふくんでをつたのであるといふ証明を欲する。

以上おぼろげながら名詞語根説について述べたつもりである。進んで用言の五段について名詞法を考へて見たいと思ふ。先づ将然言からいふと、

■将然名詞法

この段から名詞の出来ることは亀田先生が先日大学で講演せられた。先生の考では、おやは老ゆの将然名詞法で、綯ふ、鳴るの将然言がなは、なら（屁）となつたのであらうとのことである。この考を借用して敷衍すると、つるの名詞法がつら（列）、つれ（連）で、さゆの名詞法がさや（―に）（―か）で、ちるの将然からちら〳〵、ちら・つくなどのちらといふ体言が出、足玉も手玉もゆらにはゆらはゆるの名詞法であることは疑もない。全体副詞の語根といふものはみな体言である。用言の将然言が体言となるにはすつかり名詞となつてしまふわけにもゆかないので、体言的な副詞の語根となつて止つてるものが多いことは考へがたくはない。形容詞の語根についてもまた同様な現象をみる。若、高、優（―男、―形）、浅、深などもまた動詞の将然言に形容詞接尾語し（し、しく）がついたのである。

若は古動詞わく（文献の今徴すべきものがない）の将然名詞法であつたらうといふことは、わきいらつこ（わかいらつこの音韻の変化ではあるまい）もあればわくごもある。いわきなし、いわけなしもある（いときなし、いとけなしがい・とき〈分別〉なしと考へられる如く、い・別きなし、い・別けなしとおもはれぬでもないけれど、いとけ、いときのいとは幼い意〔いと姫君　紫式部日記、いと　京阪地方の語〕をふくんでをつて、これにけとか、きとかゞついたものと見る方がよからうと思はれるから、これもなほ幼いといふ意であらう）。い・わ・くは今日存してゐるこの動詞に甚しといふ意をあらはすなしがついたと考へる方が正当だとおもふ。いが動詞の接頭語となることは、い・ゆ（行）く、い・さ（去）る、い・は（這）ふ（いはひもとほりうちてしやまむ　古事記）、い・の（宣）るなどを見ても明かであるから、わくといふ動詞が実際あつたといふことは疑を容れる余地がないとおもふ。人はおゆが動詞なるに対してわかしが形容詞だといふことを不思議がる。動詞形容詞一元論者は一の屈強な拠り処としてこれを採用する。けれどもおゆに対してはわかゆといふ動詞がある。わかしに対してはおほしの意のおしといふ語がある。論理的観念

の乏しかつた古人は大きいといふこととわかい（即ち小い）といふことを対比したのである。同時にこのおしといふ語はをしとも対比せられてをる。（おとをととによりて物の大小をあらはした事はいふまでもない。）或はおしといふ様な形容詞はないといふ人があるかも知れぬ。けれども古事記を見ると、おしころわけについては古事記伝にこれらのおしを大（オホ）の意にといてある。橘曙覧はこれを難じて、大の意なるをおしといふことあるまじく、はたその心ならんには直ちに大字をかゝるべきなり。同じ意なる語に文字を様々にかへてかゝれざる、古事記の文体なればなり。というて押人命、押勝などは押の字を書いてあるから、つまりたけく、勇ましく、威徳の盛なるをあらはしとなへたものである、と、説いてゐるのは考へすぎた説で、やはり紀の一書に熊野忍隅命とあるのが他の一書にはその忍が大の字にかへてつかはれてをるのと、凡河内を大河内とかよはして用ゐてゐるのをば根拠として忍と大とが同じであるというて居る記伝の説の方がまさつてゐると思ふ。忍阪は大阪の意味で、大和の磯城郡より宇陀の阿紀野へ出る途に今も半阪というて非常な急阪のある、そのむかし宇陀の阿紀野へ遊猟に出かけた人たちがその阪に命じた名であるのが、終にその下の里の名にうつつたのである。

今一つ忍海の角刺宮のおしは、やはりおほし（即ちおほきし）の意味であらうとおもふ。形容詞のおしとみとの間にのといふ弖爾波をはさんだことは恰もうるはしの人、かなしの子といふ如く、或はかみのみ即ち神南（カンナミ）といふ地名がある様なものである。みは朝鮮語の　やまとへにみがほしものは於尸農瀰の此たかきなる都奴娑之能瀰野　とあるのは、その地理をよく説明してゐるとおもふ。また蘇我蝦夷の歌に　やまとの飫斯能広瀬をわたらむとあよひたづくりこしづくらふも（皇極紀）とある飫斯能広瀬もおしといふ地名ではなくして、大き広瀬の意味である。

※※＞※は山ではあるけれど、わが国では多く小山、岡、たかみの意につかはれて居る。

いまきなるをむれが上に（斉明紀）。

培（ツチカフ）※※　倭名鈔には田中小高也とある。

もり（森）。

但し、山の意にも用ゐて居る事もある。紀伊の牟婁郡は山の郡の意であらうし、みよしのゝ小村（をむら）が嶽の類。

わかゆに対してはおゆ、わかしに対してはおしのある筈であることも之を以て明かにすることが出来るとおもふ。

高についてもさうである。たくといふ動詞の将然名詞法であることは疑がなからう。勿論今のたくとたかしとの意味の内包には一致しない点がないでもない。けれどもこれは時代と共にふたつの語にふくまれてをる思想が互にへだゝって来たので、この考を以てたくとたかしとの関係を思うてみれば、たかしがたくから出たといふことは決して考へがたくない。

優（ヤサ）といふ語は、しく活形容詞の語根でありながら、体言的なのがめづらしいので、この優は勿論やすといふ下二段の動詞のあ母音をふくんだ形をとつたもので、四段動詞が諸種の動詞の根源であるといふ説がなり立つとすれば将然法というても差支はなからう。（これについては卑見もあるけれど、論が多端にわたるのをさけ

て後にいふことにする。）やさ男やさ形（ガタ）というても、まだ全くはやすといふ語の意を去りかねてゐるのはおもしろい。

次に、浅（アサ）は動詞のあすといふ語の将然法とも見るべきあ母音をとつた形で、河があさいとか水が浅いとかいふのは、水のあせるといふ思想をばふくんでゐるので、山が浅いとか心があさいとかいふのは水が浅いといふことから、類を推して用ゐたのにすぎないのである。

深（フカ）といふ語については水が深いといふのが元か、夜が深いといふのがもとか、容易に断定することは出来ないが、何れにしてもふくといふ語であるにちがひない。今では夜ふくとはいふけれども、水ふくとはいはない。ある人は夜のふかいといふのは漢字の深夜から胚胎せられたものといふけれども、「うば玉の夜のふけゆけば」といふ様な語つきはそんなに直訳的にもきこえない。この夜ふくといふ方をばもとゝしてふかしをとく場合には極簡略に説明する事が出来る。けれどもさうばかりはいふことが出来ない。水のふかい事をばふくといふ様にいうた古動詞があつたらうとおもふけれども、今は断定することはできない。（つけていふ、ふく・むといふ語はこのふくにあるひは関係がありはすまいか。河内の旧讃良郡に深野とかいてふこ〔ママ〕のとよむ所がある。この辺は川水のために、古くは沼地であつたので、この地名がその水とか泥とかのふかゝつたことをあらはしてをるのは勿論である。けれどもかういふことは音韻の転訛といふことによりてつぶされるから、さう〳〵ふかいりはすまい。）

近（チカ）は、つ・くから出たものらしい。近・つく、つき〳〵・し、つ・ぐなどみな密接近似などいふ意がある。

因にいふ、後撰集に、関こゆる道とはなしにちか乍ら年にさはりて春をまつかな　といふ語法は注意にあたひすると思ふ。

べらなりのべらをばめらの将然法の音転としたならば、これをも体言といふ説の一つの材料に供することができる。なりは動詞の終止と連体とにつく外は多くは体言につくのであるといふことに注意せねばならん。形容詞の将然段は普通の文法家は連用言のうちにこめてしまふけれども、よけとかあしけとかなけとかいふ語が已然にも将然にも用ゐられてゐる。しかし、これはありといふ語の融合してをるといふ説があるから、この場合には姑くこれを措いておく。

以上論じたところで、用言なるものは将然言が名詞法を有してゐるといふことがわかつたとおもふ。尚いろ〳〵の用言をもつて来てその語根について考察したならば一層明かになると思ふ。

うか・るといふ語は、うか〳〵といふ語ある如く、うかは体言的に扱はれて受身のるがつけられてゐるのである。これを使役の意味にうつしてうか・すとしても、やはりうくといふことをせしむといふ意味にするのである。なくがなかるとなり、なかすとなるのもやはりなくといふことがせられるとか、なくといふことをせさすとかいふ意味になるのである。同様にくだ・るとくだ・すはくだが語根となつてゐるので、これもやはり将然名詞法であらうとおもふ。即ちくづといふ語があるべき筈である。然しながら、これは甚だ耳遠くてそんな語があつたか、なかつたかもわからぬ。けれどもこれを発音上親族的の関係あるや行にうつしてみれば、くゆ（崩）といふ語は明かに下の方へあるものがおつることを示す、即ちくづといふ語

の存否如何に係らずくだといふ語はくゆといふ語とゝも似たものであるといふことがわかる。くつといふ語について少し考へてみると、人はくさるといふ意味ばかりとおもうてゐる。けれども雨をくだしといふことのあるのは卵の花くたしといふ語によつてもわかる。即ちくたしは従来卵の花をくを雨にぬれるといふ事に用ゐてるさうで（庄内方言考）、卵の花くだしといふのはつまり卵の花雨といふ意味であらう。

おは（負）・るとおは・すはおふといふことを、またるとすとをもつて受身と使役と両様にはたらかしたのである。ゆか・む、ゆか・じ、ゆか・ず、ゆか・ましなどゝいふ場合にこのゆかには体言的の意味が全くない様にもおもはれるが、よく考へてみればそこに体言的の意味がどうもあるらしい。

助動詞のけり、けんがけを共有してりとむとによつて時のちがひをあらはすが如き、けに過去の意味があるのでりはさし示す語であるから、けりはたしかなる過去の時をあらはし、むは想像であるから過去のある時を現在から想像する。このりとむとがけに連続する具合、らむとらし、めりとべしと、なりとなむとの如き、皆ひと綴〳〵について意味がある。けれどもどういふわけでそれがまたむすびついたのか、これをその間に観念がはたらいてした仕事であるとすれば同様のことが、ゆか・む、ゆか・じ、ゆか・ず、ゆか・ましなどの上にも応用が出来る筈である。ゆかなんの如きは、ゆくといふ事（即ちゆか）を希求する意味のなんがついたのであるといふことはあながち無理ではなからう。

さわ・ぐ、なや・む、たゝ・む、あ・ぐ、かゝ・ぐ、さか・る、うま・る、つが・ふ、ゆか・し、いとは・しなどもまた同様の事がその語根についていはれると思ふ。

■連用名詞法

連用法に名詞法のあることはいふまでもない。たゞこゝに連用名詞法の語が他の接尾語とむすびつく事についてのべて見たい。

しに・す、ゆき・すの様なのはかれ・す、おい・す、つき・すのしに、かれ、つきが連用言であることを証拠立てゝゐる。これらのしにす、ゆきす、かれす、おいす、つきすなどは体言としてすをうけてゐることは勿論であるとおもふ。

よぎ・る、わび・し、こひ・し、口語のゆれ・る、うけ（浮）・る、おき・るなども将然法ではなうて連用法であらうとおもはれる。

■終止名詞法

終止法の名詞となるといふことは従来多くの文法家にみとめられてをらぬ。けれども歴史仮字遣に於てすまふ、かげろふはすまひ、かげろひの音便であるというてすまう、かげろうと訂正した人を見ない。本居翁は字音仮字用格に於てあさちふとかかしふとかのふはおふの略であるというてゐられる。これが連体言であるとしても変である。翁の意はやはり終止言の名詞法をゆるしてゐられたものと見てよからうとおもふ。

全体終止言と連体言とをわけるのは上下二段四変格に応ずるためで、終止と連体とが区別あるのは職掌のちがひによつてある動詞はその形式がかはる、いはゞ形式の上の名にすぎない。形式の上の名であるものを直ちにとつてきて、その形式に於ては何らの区別もないある種の動詞について、これは終止だとか、これは連体だとか、名をことにしてよぶのは変なことである。四段活用の一元から諸種の活用が出来たものとすれば、そのいまだ四段活用ばかりの単純であつ

た時代には勿論終止と連体との区別がなかつたのである。チヤンバレン氏は古四段活用は終止と連体とが形をことにしてをつたのであるが、動詞全体の傾向が連体言と終止言とをば混同しようとするので、四段活用はすでにこれをわかたない。上下二段言も俗語に於てはこの区別を失うてをる。故にたゞこの一点に於てのみ二段言は四段言よりも古い形を存してをる（日本文法論、孫引）というてゐるけれども、比較的古い現存してゐる文献のうちで、連体言が終止言と同じ形である即ち終止言と連体言とはもと〳〵区別のあつたものでないといふことを証明してをる事実が多くみいだされる。これらの事実は日本動詞の最古形を示したものではないかも知れぬが、今日われ〳〵がそのあとをたどることの出来るものゝうちでは最も古いおもかげを存してをるものといはなければならない。（古事記の哭伊佐知流〔連用言はいさちなることは啼伊佐知伎也とあるのをもつてもわかるし、いさちるは上に何由（ナニシカモ）以とあるから連体言であらうとおもはれる〕は、或は古活用が今日の文献に存してゐる上から見て最も古い形であらうとおもはれる四段活用よりも前の時代のかたみをたゞ一つ古事記の上にとゞめてゐるのではあるまいか。然ながらこれは到底容易に断言せられることではない。）いくたちがこれらの場合には省かつたのであるといふかも知れぬけれども、以上は九牛の一毛たるにすぎないので、古い所ではたくさん見えてゐる。これらを悉くるが省かつたものであるというたならば、即ちとりもなほさず文法は事実の上に基礎をおくべきもので空想の立場から考へ出すべきものではないから、つまりは一歩をゆづつてるをもつた形が連体法の古形であつたといふ考をいれるとしても、事実は事実であるからそれを以て古文献にいでたるるをともなはない終止形と同じ形の連体法をうちくづすことはできない。即ちむしろ連体法の古形は（われ〳〵が今日に於てさかのぼる事のできる限りの）終止言と同一形式をそなへてをつた。とりもなほさず終止法と連体法とを包含した終止法（？）であつたのだといへるとおもふ。

みたまのふゆといふ語はこのふゆが殖ゆの意であつて、即ちみたまのふゆるであると考へて見てもおちつかぬ。やはりふゆをばふゆる事といはずにふゆという所に勢が存してをるのである。

雫はしづくの終止法か連体法かは分別することが出来ないけれども、やはりまた終止と連体とをば包含した終止法から出たものであると考へるが適当であるまいか。

古浄瑠璃の四天王高名物語其の他にやまふの道とかやまふのためにとかいふ語が見えてゐるのは、やはりさういふ所から出たのではあるまいか。といふのは京阪地方の語では連体名詞をば（いの韻をふくんだ）うの韻にかへることをさけてゐる（たゞの連用法にはうの韻にかへて用ゐることは最も多い）。たとへば東京でおむこうといふ所を大阪ではむかいさんといふ。この傾向は古浄瑠璃に遠からぬ時代の作物についても見ることができるのであるから、これはやまうではなうてやはりやまふであらう。

けれども連体法と終止法とがある活用によつて別々な形式をとつたのも古いことであるから、この推論をすゝむるについてやはり別々にといておかうとおもふ。

また今日でも、あ母音をもつて居ない上下二段活下一段さ行変格の動詞が他の接尾語と結びついて用言となる場合にあ母音をふくんだ形をとるのは音韻の変化又は四段活、な、ら変格を類推するのであるといへばそれまでゞあるけれども、動詞活用の古形を論ずる場合

に注意すべき事柄たるを失はない。

形容詞から出たよしむ、かなしむなどはよし、かなしで体言になつてをるので、よ・む、よみ・す、かなし・がる、かなしく・すなどゝ同じ意味で、とにかく終止言の名詞法である。

動詞について今少し方面をかへて考へてみると、つるといふ語が終止段からすをよんでつる・すとなる。上二段のゆるといふ語がすをうけてふる・すとなる。ゆる・すは下二段のゆるから出たのである。下二段のなゆ」に傍線」といふのはうむにふがそはつたものとおもはれる。前にいうたくづる、くづすのくづははたしてくゆとおなじ意味の動詞であつたとすれば、また終止法名詞を証拠だてゝゐるのである。同様にさくむの語根はさくの終止法名詞であらう。

すぐす、おこす、おこる、はるく、こもる、およぼすも同様にすぐ、おく、はる、こむ、およぶの終止法名詞に種々の接尾語がついたものといふことがあきらかである。

かしつく意のいつくの終止法がしをよんでいつくしとなり、つゞいてうつくしに転ずる。おそるの終止法からしをうけておそろしとなる。さもしといふ語は、今日さむといふ語は見るによしないが、その連用法名詞とみられるさみにすがついたさみすといふ動詞があるのをみれば、そのさむといふ語の終止法でしをよんだものにちがひはない。につこ・らしいといふ語が古い大阪ことばのうちにあつた。これはあほらしいとか、いやらしいとか、きたならしいとかの推量の意ではないらしいがにつくといふ終止についたのである。つぐ・なふはつぐといふ終止法名詞になふがついたのではなからうか。ひこ・つら・ふはひくの終止言につらふがついたものであらう。かういふ様な意味あひから接尾語として最も多く用ゐられるるが終止言について今日すぐといふべき所にすぐるというたり、とくといふ所にとくるというたり、すといふ所にする、来（ク）といふ所にくるというたりしたい様な気がするのでもあらうか。また和歌にかゝりのない連体どめが多くおこなはれたりするにいたつたものであらうとおもふ。

■連体名詞法

前来説いて来た意味における連体法の体言はあるべき筈のもので不思議はないのであるが、これは多く終止法とまぎれる様で、慣に連体法の体言から用言にうつつたものであるとみるべきものがみあたらない。（但、分詞として用ゐたものは別である。）

めづらしといふ語は或は一見した所ではめづるといふ連体言から出たものらしく思はれるけれど、事実はさうでない。めづらのらはさきにのべたやとかは、かとかと同類の語でめづをばかろく体言として、それにしをばそへたのである。この様に終止と連体とがきはやかにわかれてをる諸種の活用には、連体から他の接尾語をよんで用言となるものが見いだされない。四段活用その他終止と連体とに区別のない活用について、連体名詞を求めようとするのは出来ない相談である。全体連体段は所謂分詞法があるのだが、分詞といふものは体言につかずはなれずといふ状態にあるので、正しくはこの分詞法には弖爾波はつくけれども、用言接尾語はつかないのである。この段に合名詞法（熟語法）をおくけれども、それは今日ではむしろ連用法が合名詞法としては完全にはたらきをしてゐる。一体合名詞といふのはある用言と体言とがつゞくのではなうて、ある体言と体言とが接するものである。たるき、しらぬひ、くるまき（車木の説あり）などは今日の頭から考へてみると、さしみとか、うきふねと

か、よりうどゝかいふ様にたりき、しらず火、くりまきとする所である。

しかし形容詞となると少しく面目がかはつて来る。よきとかあしきとかで体言になつて居るけれども、よきとかあしきとかゞ他の接尾語をよんで更にまた用言をつくることはおぼつかない様におもふ。但し金沢先生は、よかり、あしかり、よけれ、あしけれをよきあり、あしきあり、よきあれ、あしきあれと様にいうてゐられる。これはアストン氏の語根についての考を採用せられたのではあらうけれども、卑見はやゝこれと趣を異にしてゐる。語根はアストン氏の如くゆきとかうけとかいきとかみとかいふいの母音に近いものを以て終つてをるとする考は、つまり名詞語根説には一致はしてゐるけれども、それは後世の考をば前にさかのぼらしたので、恐らくはさうではなくて、今日の存在してをる文献に徴して考へてみると未熟ながら下の様な結論に帰着するとおもふ。

（ちよつと断つておくが、おほきしといふ語はおほきといふ連体名詞法に形容詞接尾語がついたのだともおもはれるけれど、おほならばとかおほにとかいふおほにけとおなじ系統のきがそはつたので、さや・け・し、しづ・け・しなどと同様であらう。）

「「む（まし）
└┴ぶ
むつ┣「る
　└┐睦月
　└┴
　「「睦言　すめらあがむつ　かむろぎかむろみ
　「　め（探女）

さぐ┣┐る
　└┴
　「「（が）す
（ほ）┐　ひ（葵）
あふ　┣┐る
　└┴ぐ
　「「（ほ）つ
　┐└──（釣錘）
　└┐枝
　└──輪、鞍
　└┴
　└──ごゝろ
しづ┣「おり
　└┐く
　└┴む
　└「る
　└┐か
　└┴
　「「や
　「┐しね
　└┴
　└「ち
うる┣┐せし
　└┴ふ（はし、ほす、ほふ）
　「「む

┌┌（が）せを
└┴づち（迦具土神）（記　亦名謂火之炫毘古神）
かぐ┴└やひめ
　　┌や（やか、やく、やかし）
　　└よふ
　　┌ふ（はし）
たゝ┴
　└よふ（はし、はす）
　┌づ
　└┌ぬ
　└┴
い　┴└（ゆ）く（ありくはあい〈ゆ〉くなり、あるくはあゆく也、あゆむのゆむ如何）
　　└る
　┌か（┴し）
おろ┴┌おろ
　└┴
　└┌おぼえ
　└┴
　　┌が来る（大阪語）
　　└┴
　└┌おぼえ
　└┴
　　┌ふ
　　└┴（そ）ぐ（かし、かはし、かす）
（いすゝ）┴（そ）し（しむ）
　いす　┴（そ）はく
　　└┴すぐ
　　└┴（そ）ばふ（〳〵いそぶ？）
　　└┴ろこふ（〳〵いそろぐ？）（大殿祭祝詞　神たちのいすろこひあれびまさを云々）
　　└┴く（かし、くる）
　　そゝ　┴
　　　└のかす（〳〵のく）
　┌┌む
すゝ┴└┴
　　└┴（さ）む（まし）
　　└ろ（漫）
　　┌く
　　└もつ」
　　└　┴（〳〵む）
　┌┴もる」
（ご）　└┴めく
うぐ　┴└なふ（はる　集伝　大祓祝詞其他）
むく　└┴と
（もこ）└┴つく（けし）
　└┴めく
　└┴む
　└むくし



（もこ）よふ
（ば）る
あぶ
る
なふ
うづ
なし
た――〳〵とをゝ
わゝ　く
――
ら（らば）
むつ、さぐ、あふ、しづ、うる、かぐ、たゝ、いす（いすゝ、すゝ）、うぐ（むく、もこ）、あぶ、うづ、わゝ、の如き名詞ともつかず動詞ともつかず、八品詞のうちでは先づ感嘆詞に近い体言とみるべき語根が其まゝ又は種々の接尾語の連続によつて動詞とも形容詞とも副詞とも又名詞ともなるので、かういふところから（動詞の終止言がうの韻でをはつてる事が共通語根のをはりに多くuをみいだすのに似て居る）、

す（将然か音転か）
（や）
む
（よ）ぶ
（よ）る　なよるは馴寄也といふはなゆ・ると説くに如かず

（ぶ）す
のぼ
る
む
かく
す（〳〵さふ）
―（こ）ふ
る
（ぐ）む
なご
る
のなゆ、のぶ、かく、なぐ、の如き終止言が体言となつて接尾語をうけたものらしく思はれる。これらが体言的のあつかひをうけるべきことは前にものべたが、なほ肩ぐ、あぎとふ、あきなふ、時めく（心ときめくのときは今は濁つてどきつくなどゝいうてゐる。此処の時は其とは違うて時を得る、ときめく等の時である）、はらむ、香ぐなどゝいふに徴して明かであらう。

連体段について述べるつもりが意外にわき路へ這入りこんでしまつたが、ひつくるめていふと、連体言に他の接尾語を加へて、用言とするといふことは疑はしい。ただ形容詞の連体言についてはわが師は之を認めて居られるけれど、よくあり、あしくありと連用言からありを受けたものと考へる方がどうもまさつてる様に思ふ。なる程あり、す、うといふ様な語がい母音に関係のふかい段につゞくといふことはわかつて居るけれど、これを拡張してよきあり、あしきありと説くことはさかしだてする様ではあるけれど師説ながら服しがたい。

あり、う、す、むの複合即ち今日でも稍その語源の意を認められる接尾語の外にも単綴のものでは、く、つ、ぬ、ふ、む、ゆがある。ゆとむとは語源のおもかげをおぼろげにみることが出来るが、く、つ、ぬ、ふについては今日のところでは音義をとくほかはない。はたして複合のために用ゐる動詞があり・う、す、むばかりであるとはどうもいへない様に思ふ。況やずつとはじめにならべておいた諸種の接尾語もゝとはそれ／〃＼やはり独立の用言であつたと考へられるにおいてをやといはねばならぬ。

つまるところ用言の語根は古くはい母音でをはるものではなうて、う母音でをはる語であつたのが、終止段が此に似てをるから、そこで語根となることがあるので、そのう母音でをはつてゐる語根といふのはまへにいうた通り動詞でもないまた名詞でもないが、また動詞にも名詞にも融通して用ゐられる語で、形式の上からいへばまづ体言とでもなづくべきものであるらしい。

いく（生）といふ語は息をはたらかしたのだと大矢透氏が説いてゐられるけれども、むしろ自分は名詞でもなく動詞でもないいくといふ語があつてそれが直ちに活用したのであると思ふ。これをかりに渾沌時代と名づける。

いく　渾沌　「生太刀」（古事記）　「名……いく…
…いき　時代　「生弓矢」　├　「
—いこふ　生日の足日（出雲国造神賀詞）—形　いかし
穂　生井（祝詞に多し）　「動　生く

右の表に示した様に渾沌時代に於けるいくは形容詞的にも動詞的にもまた名詞的にも見られる。いかしほのいかしは普通に厳の意にとくけれど、之はいき〳〵した所をいうたものでそのいきほひのある所から厳の意味が出てきたのであらう。それについてはいきむとかいきほふとかいふ語を参考すれば、その間の消息がやゝうかゞはれる事とおもふ。

——）大祓、出雲国造神賀詞　「とよさかのぼり（朝日の
「さか├　「さか木
さく　渾沌　栄井（サクヰ）　┬さく┬さかゆ　┬？
時代　「咲く　—笑　——はふ—
……├　「さき（幸）」
「さかる

なども栄井の時代にはまだ動詞とも形容詞とも名詞ともならなかつたのであるが、いの母音をよんで幸となり、またゑみさくなどの動詞となつて活用をもつてきたのである。さきにあげたむつについてもかくについても、この渾沌時代を想像することが出来る。いくと

かさくとかむつとかについて尚一つ考へてみると、渾沌時代のことばは或は子韻でをはつてをつたのであらう。即ちうがそはると動詞となり、いがつくと名詞となる。あの母韻がつくと主に副詞または形容詞となる。

「ます＋ら＋雄　　勝
ます　渾沌上天益人　　増
「まそ＋け・し（まさ＋き・く）　正

益荒雄と記紀万葉にかいたのは借字で字によつて、たけ〳〵しい意があるとするから小田のますら雄の説明が出来ぬので、ます＋ら＋雄であつて達者な男といふ意にとれば不思議はない。まそ＋け・しといふ語が達者なといふ意を暗示して居るではないか（兵部令にちからびとの事を健児（コンディ）と宛てたのにも此辺の消息がうかゞはれ相である）。天益人の如きも黄泉津平坂のことゞわたしの時に、

汝国之人草一日絞殺千頭愛我那邇妹命汝為然者吾一日立千五百産屋是以一日必千人死一日必千五百人生也

とあるのにかまけて、大祓の「国中成出天之益人等」とある語をみな死ぬるよりも生るゝ数のます意だとといて居るがどうもおちつかぬ。神々の御ちかひによつて、まそけく日々にいそしむおほみたからの意と解する方が適切であらう。

以上は一つの仮説にすぎぬ。其語の渾沌時代から生れて来る順序有様等については、或は表に示した所に不完全な点あやまつた点がないでもなからうとおもふ。

今一つこの連体言について考ふべき事は所謂延言の一種々々を語尾に伴うたものについてゞある。いはく、申さくは将然言からくをうけたものとも見られるけれども、これは恐らく音転であらう。く延言が連体法から出る証拠は万葉の　わが背子を何地ゆかめとそきたけのそかひにねしく今しくやしも、勢語の　桜花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに　等の歌をみてもわかる。これらは、ねしこと、おいといふもの（おゆること）といふ事であるから全くの連体法で、これを（ねし、おゆら）体言ともみられぬでもないが、よほどくるしいと思ふ。

つけていふが所謂く延言は、うの韻のある所から動詞として用ゐられることもあるやうである。例へばいそはくはいそふの所謂延言である。それが四段活用にうつつた如き。

■已然段について

已然段についてはいまだ一つの体言らしいものも見いださぬ。全体已然言と命令言とは形容詞に於て一見してわかる如く、用言の諸活用のうちで何だか特別なものゝ様である。

将然連用終止〔連体〕〔已然〕

もし四段一元が事実ならば終止と連体とは一つになる。そして上下二段活上下一段活を見ると、将然と連用とにも四段の終止と連体に於けるが如き関係が見られる。動詞活用古形については考のまとまる日をまつて、今はたゞ動詞形容詞活用の各段に於ける体言の有無について卑見をのべて、更に接尾語がこれらの体言について用言をつくることをいうたまでゞある。

今話をはじめにかへして、

いとは・し　いとほ・し　よろこば・し　よろこぼ・し
ゆら・ぐ　ゆる・ぐ　およは・す　およほ・す

等について考へてみると音韻の転とのみもおもはれぬ。どうもある

点までは音転といふことも考へて見ねばならぬが、将然と終止とがおの〳〵ある接尾語をよんで他の用言を再びつくつたものと考へる方が前々からのべた通りでよささうである。

こひ・し　さび・し　わび・し
ゆき・す　死に・す　かれ・す
よぎ・る　ゆり・る　ゆれ・る

の様なのは連用法体言から出たもので、前項の将然言や終止言から出たものよりは体言的の意味は深い様である。もしも将然言と終止言とがおの〳〵ある接尾語をよんで用言となつたのではなくしてどちらか一つは音転によりてなつたものだとすれば、自分は人の将然言の方を元とするのに対して、むしろ終止言を根本とすると主張せうとおもふ。もしも将然言をもとゝすれば、ねしくとかおいらくなどのく延言はどう説明するのであらう。ねしむ、ねし（将然言）、おゆらむ、おゆりなどゝいふ珍妙な活用があることをも肯定せねばならぬ。自分は前に終止と連体との親族的関係のある事についていうておいた。それによつてみても、むしろ終止といふ方が将然といふよりもまさつてをりはすまいか。この場合に於て終止言に連体の意味があるというても差支はないけれども、決して形式の上に混同してはならぬ。形式の上ではむしろ動詞の連体言が体言的になつて接尾語をよぶといふよりも、連体終止の二段をかねた終止言が接尾語をよぶのである。即ち活用が一元に帰するとすれば、今の四段活用の様に終止連体うちこめて終止とする様な活用でなければならぬのである。さなくては、今の上下二段諸変格の連体が接尾語をうけて用言とはならずに却つて終止からうけるなどは奇妙な事といはねばならん。

かういふわけで、ある点までは連用もまた将然言にこめて考へることが出来る。

さうすれば問題は大体に於て将然と終止との上にのこるわけである。くりかへしていふが、自分は音転といふことをば認める。けれども此れを極端にひろげて考へることは出来ない。自分としてもどれもこれも終止と将然とからおの〳〵別に出発したものとはいはぬけれど、これを悉く一元に帰せうとする意見には賛同の意をあらはすことはできぬ。かうして、

つくろふ　は　つくるの終止からふをうけたもの
かたらふ　は　かたるの将然からふをよんだもの
かこふ　は　かくの終止にふがついたもの
たゝかふ　は　たゝくの将然がふをうけたもの

であると説かうとおもふ。（かたらふをかたりあふ、たゝかふをたゝきあふであるなどゝいふのはどうかとおもふ。一体反切をいろ〳〵の方面に応用した事は明かな事実で、記紀万葉あたりにもこの反切の応用が見えてゐる。しかるにやゝもすれば占（ウラ）ふといふ処に占合、占相、たをやめに手弱女などゝあて字を用ゐる。うらふ、かたらふ、たゝかふのふにうつつてゐる語のやうにあつかうたのはおもしろくない。）

金沢先生は延言考において、韓語の動詞形容詞に二つの名詞法（※、※）がある事とわが形容詞にばかりki miの二つの名詞法がのこつてをる事とから推して、動詞にもm形の名詞法が昔はあつたので、ひろき、しろきがひろく、しらぐとなるやうに、ひろむ、しろむはひろみ、しろみの名詞法から動詞にうつつたのでこのm形が変じては行延言と称するものが出来たのであらう、というてゐられる。

けれども考へてみれば、延言と称すべきものは決しては行とか行とばかりにあるわけではない。ki: mi: のいの韻をもつた名詞法から動詞となるといふ事から、先生の動詞の語根をいの音に関係ふかきものを以て定められてゐる立場から見れば当然ではある。けれども、よそ・る、ふる・す、まさ・る、うこも・つなどはどう説明すればいゝのであるか。

よすがかたらふとかみまくとかにふ、くがつくと同じ様にるをうけてよそるとなる。

ますの将然からるに接してまさるとなることはみまくとかかたろふとかと少しも差異はない。同様な事がうごもつ、うごもちの上にもいはれる。うごむはむくむとおなじことばで、之にる、つがついて出来たというて何の差支をも見ない。

ふる・すはふるといふ動詞にすをつけたもの、たる・むはたるにむがそはつたもの、ゆる・ぶはゆるにぶがついたもの。

かういふ風にのべて来ると、延言と称するものは決してく、ふにかぎらぬことが明かである。

更に注意すべきは二重にこの作用をするものがあることである。即ち、

よそほふは
　よそ・ほ・ふ〳〵よそ・ふ〳〵よす
ひこづろふは
　ひこ・づろ・ふ〳〵ひこ・づる〳〵ひく

の類である。

更におもへばゆか・るでもゆか・すでも、うか・るでもうか・すでもやはり所謂延言だと称する事が出来る筈である。

延言と称する名称の不可なることは用言のある活段を体言と考へて之に接尾語をつけて用言としたので、決して語尾を延べてつくつたものでないことを以てみても明かである。

終につけそへておくが、これまで延言と称せられたる、ふ、その他く（みらく、こふらくのくではない）、す、つ、ぬ、は、ゆ、る、う（ぐ、ず、づ、ぶをも加へて）及び二綴或は二綴以上の接尾語について、その意を考へてみれば面白い結果が得られるとおもふ。勿論るには有の意味があらう、すには為の意味があらう、うには得の意があらう、むには見の意味があらう、けれども、る、す、む、の説明もなほそれだけでは不完全である。その他く、つ、ぬ、ふ、ゆをはじめ、多綴音の接尾語についても考へてみる必要がまだ〳〵ある事とおもふ。

く
　つな・ぐ（綱ぐか列ぐか）
　かゞ・や・く、おどろ・く、うご（〳〵むく）・く、うな・く、さや・ぐ、そよ・ぐ、そゝ・く、せゝら・ぐ、よろ・ける（〳〵く）、ゑら・ぐ（ゑら〳〵）
　こほろぎはこほろ（擬声）ぐの名詞法か
　はらゝ・く、とゞろ・く
す
（ご）
　一一
　すぐ・す、たゞ・す、はや・す、かく・すのぼ・す（延ぶ、※〈高〉）
　其他助動詞す

つ
たぎ・つ（おち――、水のたぎち）
もみ・づ（もみは色にや）
い・づ（いる、いぬ、いく）

ぬ
ふさゝぬ、かたゝぬ
つら・ぬ、つか・ぬ
な・ふは此ぬの二重発展にて其経路必ぬを経たるなり
かゝ（屈）・なふ、たゝ・なは・る

む
しづ・む、なや・む、下（シタ）・む（大阪語）
かく・む、むつ・む、しわ・む、そば・む、うる・む、せ・む（狭む）
あが（上）・む
（よみ・す、さみ・すも同じ名詞法）

ゆ
こゞ・ゆ、むく（向）・ゆ、おぼ・ゆ、見・ゆ、たか・ゆ、あま・ゆ、煮・ゆ

ふ
ちか・ふ、ねが・ふ、かこ・ふ、つた・ふ等

る
あらは・る、そゝ・る、まく・る、あか・る、こも（〳〵こむ）・る、かく・る、よす（〳〵す）・る、むつ・る、まさ・る
うは居（ウ）也

姓氏録に、伴信友の高橋氏文考注に、稚湯坐（エ）連あり。う…す・う、うま・う、みな位置を定むる意あり。崇神紀倭迹々百襲姫命の薨ぜらるゝ条には、妾倭迹々姫命仰見而悔之急居（急居、此云菟岐于）則箸撞陰而薨。

この推論をとちむるにあたつて、この篇の進行中に自然先達諸家に対して礼を失した点があつたならばひとへにその寛容を希ふのであります。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　12」中央公論社
　　1996（平成8）年3月25日初版発行
※題名の下に「明治四十一年頃草稿」の表記あり。
※底本の題名の下に書かれている「明治四十一年頃草稿」はファイル末の注記欄に移しました。
※複数行にかかる中括弧には、けい線素片をあてました。
※三字下げの箇所は、欄外に書かれた注記です。
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2009年8月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

用言の発展

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/